渋ぬりのあとなかりけり藤はかま　栄傾
朝雨をふしにふくみてつく〳〵し　旭齋
明る夜の匂ひみちけり春の水　月杵
黄鳥も藪に啼日の袷かな　可候
汐寂の木々の中なり桃の花　季成
蒔水も乾きて秋立にけり　喜年
紫の露もあら野のすみれ哉　有舎
薄雲と桜は中のよかりけり　保久賀
ひとまつはさやかに出つはるの月　西翁
水仙にしはしたもつや日の暖み　他山
気の付て見る露清しけさの秋　香雪
軒ちかく鳥囀るや朝な〳〵　清民
盞をとらぬ日もなし梅の花　壮山
雉子鳴て行先みゆる夜明哉　多よめ
浪音を遠く見返る暑かな　一止
青麦や忘れし雨も待こゝろ　江三
あらそはぬ空と水とやはるの海　布山
朝夕となく見廻るや稲の花　盤齋
遠くから来た声てなし初鴉　松圃
茶の花の咲て明るし畑つゝき　峰秀
古根からしらぬ草まて萌にけり　葱玉
すゝしさに相手もいらぬ草家かな　素山
湖に入込畑やもゝの花　江春
雪もふむ身拵ひして小松曳　碧水
白露も香にたつものそ八重葎　静渕
屠蘇の醉をかし終日朝こゝろ　御風
裏町ははや遊はれてうめの花　卓郎
紅うらの着もの吹すや春の風　思楽
はつ秋や雛もましりて都鳥　春湖
門ちさく入て中々梅はやし　苣麿
初かはつ田水流るゝ音もなし　黙平
空向て枝新らしき野梅かな　棄暁
旅人のものにして見る野梅かな　宇山
鳴ころとおもふ夜になる蛙かな　乙五
打出せはおなし匂ひや芹薺　幽止
花うつす水や涼しき物に見る　尋香
軽く来る風のゆとりや花の色　桐齋
御降やつらりとならふ宮の鳥　皿子

植上けてさゝ波つくる田面かな　由地
明てある夜をうかれけり虫の声　月茶
星きら〳〵汲若水にゆれにけり　葎露
卯の花やいつか温泉宿の夕ともし　甫柳
やま〳〵のみとりひかへてはるの鳥　草友
四五十歩通り過して梅ひと木　北露
人住は島根山根もうめのはな　太年
残されて梅は咲なりひらき畑　貫乎
梅咲て宿にもいたし出も出たし　波鷗
苗代やけふは水さへ見へぬほと　如白
蚕飼へは夜空も覗くならひ哉　新甫
音もふりも春のかろみや百千鳥　きく雄
はつ夢は見ねと寐覚に福寿草　五休
ひとわたり野をほのめかす霞哉　花外
雨気もつかねや雉子啼桐はたけ　卜早
また雪のふりなからやいかのほり　皷汀
水底もかすむと見るやうつる空　稔郎
番ひとはおもひもつかす鳴水雞　見外
花の原たゝうつくしと見て過ぬ　香暁
隣からとなりへうつる梅見かな　ミき雄
わか草や月もよい夜になりすまし　蘆城
ひきかへて此しつまりや花に鐘　草栖
寐ぬ事にきめてかりけり梅の宿　甘志
若水や柳を潜る汲こゝろ　永年
足る程に茂るを鉢の楓かな　素珉
はつ手水こゝろの皺ものひにけり　甘茶
さす汐のたゝへて鳰の浮巣哉　香城
ともからみする朝顔や最合垣　不染
翌の用すゝしき胸にうかひけり　普陽
鞠羽子やそれも優美な田舎ふり　羽人
何鳥か寝た影丸し月の梅　可尊
戸明れは高き日あしや時鳥　奇泉
手ちかくの梅つまみ込雑煮かな　永機
後になり先に成行花見かな　芳泉
春の日や我にも添はぬわか心　鶯室
売るほとにつはな揃へぬ時処　存長
暮遅し水にほんやり月のある　小雲
曙やまたわすれすになく蛙　留木